
僕のカモネギが強すぎる件について

カマボコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕のカモネギが強すぎる件について

【Nコード】

N2442BA

【作者名】

カマボコ

【あらすじ】

最強のカモネギを手に入ってしまった主人公は何故か望んでもいないのにエリートトレーナーになってしまう。そんな変わったお話を。

基本、戦闘はアニメ基準ですのでゲームとは異なったものになります。

出だしからやばい件について(前書き)

勢いだけで書きました感があるのは気のせいです。

出だしからやばい件について

十二歳の誕生日、両親に旅に出ると言われた。突然過ぎて驚きが隠せないままの僕に両手で抱える程の大きさの卵を渡された。すると卵が動き出し、ピキピキとヒビが入り、パツカリと開いた。

中から元気よく飛び出してきたそれは『カモネギ』だった。

カモネギは赤帽子の髭おやじのようなジャンプで、体操選手顔負けの回転をしたと思えば華麗に着地。この間、四秒。カモネギは決め顔でこつちを見てドヤドヤと伺っている。僕が凄く凄いと拍手とセットで褒めるとふっ、とクールな素振りのご対応。

何だこれ……

まさにその言葉がこの状況に適していたと思う。そして僕の引き攣った顔に止めを刺すかの如く、いつものヘラヘラした顔の父が真剣な顔で、

「先祖代々受け継がれてきた家宝だ。持ってけ！」

と、『金色のネギ』を渡された。

思わずそのネギで父の頭をぶつ叩いた僕は悪くないだろう。

軽く半泣きの父は無駄に長い武勇伝を語った。

それは父が昔、カントーのチャンピオンになった話だった。それは凄い事だと思ったがさらに凄い事に、『カモネギ一匹』だけで殿堂入りしたそうだ。

冗談だろ？　　と思い、ありえないと言ったらチャンピオンの証である賞状を見せ付けられた。オマケにカモネギとのツーショットも。ここまで見せられた以上、信じる他なかった。

それから自分からチャンピオンを辞退して公式ジャッジになった話や、母との出会いなどを語ってくれた。

そして母もカモネギ使いだった。昔はライバル同士だったそう。それが友情になり、愛情になり、結婚したのだと。

今では仲のいいカモ……いや、オシドリ夫婦だ。

そんな両親のカモネギもオスとメスだった事もあり、夫婦になった。こうして生まれたのがさっきのカモネギなのだった。

えらく纏まった話につきこむ間もなく、旅の支度を父がしていた事に驚く余裕も無かった。

何だこれ……

「じゃあ、行ってくるよ」

僕がそう言つと母は泣きながら手を振る。大袈裟だな、と思いながらも自分を思ってくれている母に感謝しながら旅へ……

行こうとしたら父に止められた。空気を読んでくれとモヤモヤしたまま耳を傾ける。

『ついでにこれを持っていけ!』

と言われて渡されたのが……正式名称がわからない……

簡易なヘッドフォンのような形状だった。よく見ると、マイクが付いてある。それが二つあった。何だろうと思い、父に聞いてみる。すると父は、

『インカムと言って、ポケモンと会話出来る物だ。まあ、オマケのような物だよ』

こっちの方がすげえじゃねえか! と父をぶん殴ってしまった僕は悪くないだろう。

取りあえず、自分の住んでいた町の隅っこまで来た。後は真っ直ぐ行くだけ。そしたら初めて旅に出る事になるのだ。

そしてまず、僕にはやらなければならない事がある。

そう、このインカムとやらだ。

はたしてこのインカムを使えばポケモンと話す事が出来るのだ

ろうか。唯のドッキリで嘘なんじゃないだろうか。

信頼性の欠ける行動だった為かいまいち信用できない。だが、何事もチャレンジだ。物は試しても言うし。

僕はパートナーであるカモネギにインカムを付け、自分にも付けてみた。何言おうかな？ とりあえず無難なところで……

「今日からパートナーになったランだ。よろしく」

味気無い無難な台詞で試してみた。どう返してくるか楽しみだ。カモネギのクチバシがゆつくりと開き話す。

『ああ、よろしく頼むぞ相棒』

まさかの本物！？ まあ、父は嘘ついた事無かったしな……

… それでも少し疑わざる負えなかったのだ。だってねえ……

まあ、とりあえず、今わかった事はこの機具は本物で、カモネギはメスだった事だ。

何故メスだとわかるのかと言うと、事前に母から聞いていたのもあるが、今の声で確実なものだとわかった。

カモネギはハスキーボイスでクールでカッコイイ女の人のような言動だったからだ。

姐御と呼べばいいのだろうか？ そこんとこ悩む。

『何を悩んでるんだラン、冒険の旅に行こうじゃないか』

独特のかつこよさを見せ付け、僕を急かすカモネギ。急かす…
…？

「……そんなにこの町から出たいのか？」

疑問を口に出してみた。

「な、何を言うんだ？ 私としては親元を離れなこればいけないんだぞ？ これは生後二時間にも満たない私には不幸な事であつて
」 「じゃあ、戻ろうか？」 「私の負けだよ………」

ペタンと仰向けになつて服従のポーズをとるカモネギ。ちゃんと金色のネギも足元に置いてある所完璧である。

それは犬がするものじゃないのか？ といった野暮な疑問は口にしない。言ったらそれはそれは悲しい旅のスタートになつてしまつてある。なのでお口はミツフィー。

まあ、理由を聞こう。

「どうして町にいたくないんだ？」

『それが………』

『 』
と云つた具合で………』

「カモネギ、お前もか……」

話をまとめよう。

実は、僕が卵を貰う少し前に、産まれていたそうさ。まあ、あんなタイミングよく産まれる訳ないしね。第一、産まれて直ぐに空中三回転を出来るつわものはそうそういないだろう。

じゃあ何故、外に出なかったのかと尋ねたら、血相変えて、

『私の母親と父親との会話で我が子への期待がとんでもないものだった……』

と羽根を震わせながら語ってくれた。

まさかここまで偶然と言うものは起こるのだろうか。

僕の両親もカモネギの両親と同じ、『親馬鹿』だった。

だからカモネギの話は自分が体験したかのようにわかるのだ。

「カモネギ……僕の両親も……」

最後まで言わずともカモネギは理解してくれた。

『そうか……ランもだったか……』

「ああ、そうさカモネギ。僕達は似た者……いや、似た動物通しだったんだ」

『「これからよろしく頼む相棒!!」』

絆が深まった瞬間だった。

出だしからやばい件について(後書き)

カモネギL.V.:そくていぶのう

カモネギがかっこよすぎる件について

「カモネギってどれくらい強いんだ？」

一番気になる事を質問してみた。トレーナーとして、やはり、自信がある方が戦いやすいというものもあるし、普通のトレーナーならポケモンのそういった気持ちもわからずに戦っているのだと知ったら尊敬できると思う。そう考えると僕は反則紛いだな、とか少し自分の状況はセコイなと思う。

『強さは口で語れないものだよ』

何このカモネギがかっこいい。イケメン過ぎるぜ相棒。

僕がカモネギのかっこよさを改めて認識していると、鳥系のポケモンの羽音が聞こえてきた。この場所的にはムツクルか？

「ムツクル！」

やはり、ムツクルだ。このわかりやすい鳴き声がポケモンの証拠である。ポケモン図鑑なんて大層なもの持ってないから鳴き声で判断するしかないというワイルドな対策しかない僕はなんなのだろうか。まあ、この際気にしないとして……

「カモネ 「この……！ 言うてはいけない事を三回も言い
やがって！」

カモネギがムツクルにキレてた。このインカムを付けているもの

同士でしか翻訳されないのので何を言われたのかは知らないが、よっぽどム力つく事を三回も言ったんだなと思う。ここはトレーナーとしてカモネギに指示しなければならぬ所で 「ム……クル……」 えっ？

気づいたらムツクルが倒れていた。そして、ムツクルの背後には剣を収めるかの如く、ネギを収めていたカモネギの姿が…… 何が あったというんだ。

『安心しろ。みねうちだ』

みねうちだそうです。

ん？ みねうちってなかなか覚えないうって父が言ってたような……
… まあ、カモネギだし、そこんとは関係ないよね。

「兎に角、カモネギが強すぎる事はわかった」

『そっかそっか！』

「だけど、僕の指示には従ってくれよ？ まあ、野生のポケモンは仕方ないとして、トレーナー同士の戦いなら向こうは策を練るだろうしさ。頼むよ」

『むっ……まあ、仕方ない。トレーナー同士の時だけだぞ』

カモネギは口を膨らませ、妥協してくれた。よかったよかった。

そして、僕たちはジムリーダーがいる町に着き、そのポケモンセンターで休む事にした。カモネギは疲れてない！の一点張りで中々ポケモンセンターに行ってくれなかったが、旅には休憩が必要だよと、強引に説得して連れてきたのだ。そんなカモネギも今では仲良く他のポケモンと話してたりする。案外気に入ったようだ。

『ほう、そんな軟弱者なのか、君のパートナーは。私が叩切つてやるっか？』

頼もしいような怖いような発言で盛り上がっているのでカモネギはここに置いといて……少しトレーナーらしい事を考えよう。

まず、バトル方式によってはカモネギ一匹じゃ駄目だよな、ダブルスの場合、強制的に負けになってしまうだろうし。それに別の地方ではトリプルズがあるそうだ。さらにピンチである。

どうしようか……と悩んでいると、グラスンを掛けたおじさんが近づいてきた。そしておじさんは僕に話掛けてきた。

「少年、どうやらポケモンの事で悩んでいるようだね。そんな悩みもこのポケモンがあれば吹っ飛んでしまっけどね」

あっはっはーと高笑いするおじさん。手に持っているボールがそのポケモンのようだ。

「それでだ少年、この伝説のポケモンをなんと！五百円で売ろうではないか！どうだ？お買い得だろう？」

五百円……おじさんの大袈裟な素振りからいいポケモンは期待

出来ないが、取り敢えずポケモンと謳ってるのでいいと思う。おこづかいを貰い過ぎて五百円を使ってもまだまだ余裕はあるし、買おうかな？

「じゃあ、買つよおじさん」

「毎度あり〜〜！」

おじさんはモンスターボールを渡すと、逃げるように走って出て行った。取り合えず、弱いポケモンだという事はわかる。まあ、ポケモンだったらなんでもいいのだ。一応、二軍のようなポジションであるし、一軍さんは二軍に譲らなさそうだし。

そして初めてモンスターボールを使う事に気づいた僕はどっきどきしながら恐る恐るボタンを押した。

「……………」

なんか鯉みたいなのがピチピチ跳ねてる。

「美味しそう……………」

思うわず本音が漏れてしまった。その時に鯉みたいのがびくん！と跳ねたのは見間違いだろう。それと少しづつ僕から遠ざかっているのは気のせいだろう。

あのポケモンの名前はコイキングと言つらしい。よく釣れる事で有名だそうだ。しかも強い弱いとかそういう次元じゃなくて戦う事

すらまともにも出来ないのだとか。

まあ、おいし……じゃなくて、非常しょ……でもなくて、進化するらしいから頑張ってると思う。

『ラン……こいつが怖がってるぞ。食べられるって』

カモネギがじたばたしているコイキングを指さして言った。僕が見るには唯、じたばたしているだけに見えるコイキングもポケモンから見れば怖がっているように見えるのだなと視点について考えてみる。そしてコイキングの今後についても……

『おい、よだれよだれ』

はっ！ どんだけ魚に飢えてるんだ僕。まあ、魚料理は美味しいから仕方ないといえば仕方ない事でもあるし、コイキングも美味しそうに跳ねるから余計食欲を駆りだたせる効果がある訳で、言い訳とかではないのだ。

こう、生きのいい魚を見るとよだれが出るのは人間の本能的なものであって、魚好きだからというわけではなく、単純に、生物的反応として正しいものであって、成長期兼育ちざかりの年頃としては嬉しい反応だと自負している。だから生け作りにするか炭火で焼くか考えても悪くはないのだ。ポケモンだって動物は動物なのだし、同じ魚と見ても仕方ないだろう。

『コイキング……早く成長しないと……やばいかもしれんぞ』

ふと横を見ると、カモネギの意見を肯定するかのようによく飛び跳ねてるコイキングがいた。

カモネギがかっこよすぎる件について（後書き）

カモネギLV：そくていふのう

コイキングLV：5

～おまけ～

ムツクル「えーうつそー、カモネギって進化しないの？ 鳥ポケモンで進化しないって古くない？ 進化しないのが許されるのはエアームドさんだけだよね」

その後、切られました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2442ba/>

僕のカモネギが強すぎる件について

2012年1月6日18時54分発行